

千曲川・犀川直轄改修事業100周年記念シンポジウム

千曲川河川事務所

～100年の歩み、未来へつなげて～



日時：平成30年11月25日（日）13：30～16：30 【参加者：600名】

会場：長野市若里市民文化ホール（長野県長野市若里3-22-2）

主催：千曲川・犀川直轄改修100周年記念事業実行委員会

【構成団体】長野県/長野市/松本市/上田市/須崎市/中野市/大町市/飯山市/千曲市/安曇野市/生坂村/坂城町/小布施町/木島平村/野沢温泉村
/国土交通省北陸地方整備局大町ダム管理所/国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所

出席者：下条みつ（衆議院議員）、務台俊介（衆議院議員）、羽田雄一郎（参議院議員）、杉尾秀哉（参議院議員）

内容：○記念合唱「桜づつみ」、千曲川・犀川の歌詞がある「校歌」長沼小学校、芹田小学校児童

○基調講演「いのちを守る気象情報」講師：齊田季実治（気象予報士、防災士、危機管理士）

○ふれあい絵画コンクール表彰（金・銀・銅賞受賞者 小学校低学年5名、小学校高学年5名、中学生5名の計15名）

○学習成果発表（①長野市立芹田小学校4年生児童 ②坂城町立南条小学校4年生児童）

○パネルディスカッション「防災～逃げ遅れゼロを目指して～」

コーディネーター：増田正昭（信濃毎日新聞社 編集委員）、

パネリスト：加藤久雄（長野市長）、吉谷純一（信州大学工学部教授）、齊田季実治（気象予報士）、中山久貴（長野市立芹田小学校長）

清水邦広（長野市柳原地区住民自治協議会長）、木村勲（千曲川河川事務所長）

1918（大正7）年に始まった第1期千曲川改修事業以降、第2期改修事業に着手し、今日にいたるまで、流域の人々の生命と財産を洪水から守るため河川改修事業を行ってきました。そして2018（平成30）年、千曲川・犀川直轄改修事業は100周年を迎えました。

治水の重要性を認識するとともに、千曲川・犀川を財産として、活力ある地域づくりを考え、流域の防災意識をさらに高めて頂くための記念シンポジウムを開催しました。



開会状況



開会挨拶

加藤長野市長



記念合唱

長沼小学校、芹田小学校



基調講演

齊田季実治（気象予報士）



ふれあい絵画コンクール表彰式



学習成果発表

芹田小学校、南条小学校



千曲川 パネルディスカッション

コーディネーター
信濃毎日新聞社 編集委員
増田 正昭 様



閉会挨拶

松原河川部長

信濃毎日新聞(朝刊) 平成30年11月26日(月)

NHK 平成30年11月26日(月) 6:57～

千曲川改修100年 振り返る

水害と治水 長野でシンポジウム

国土交通省千曲川河川事務所(長野市)、県、千曲川・犀川の流域市町村などで行くる実行委員会は25日、1918(大正7)年に国直轄の千曲川改修事業が始まって100周年を迎えた記念のシンポジウムを長野市で開いた。住民ら約600人が参加。水害と治水の歴史を振り返り、防災意識を新たにしました。

同事務所の木村勲所長が、流域で江戸時代以降に発生した洪水や治水事業の概要を説明。7月の西日本豪雨など全国で相次ぐ水害にも触れ、「逃げ遅れる人をなくすにはハードとソフト両面の対策が重要」と述べた。

防災をテーマにしたパネル討論で、信州工科大学(長野市)の吉谷純一教授(土木工学)は「水害の危険が迫ってもほとんどの人は逃げない。意識を変えていくには、子どもの頃の教育が重要になる」と強調。長野市柳原地区住民自治協議会の清水広邦会長(67)は「今回も大丈夫だろう」という思い込みが怖い。早めに避難するよう繰り返し呼び掛けたい」と話した。

水害への備えを学んできた長野市芹田小学校、埴科郡坂城町南条小学校の各4年生による学習成果の披露もあった。

た。芹田小の児童は「洪水が発生したら、まずラジオで情報を集める」、南条小の児童は「家族で話し合ってから避難場所を確認した」と発表した。



全国各地で豪雨災害などが相次ぐ中、河川の氾濫などから命を守るための備えについて考えるシンポジウムが昨日、長野市で行われました。このシンポジウムは、千曲川と犀川の改修事業が始まってからこととして100年になるのを記念して、国土交通省の千曲川河川事務所が開きました。



シンポジウムでは、全国各地で豪雨災害が相次ぐ中での防災、減災の取り組みについて、専門家などが参加してパネルディスカッションが行われ、千曲川河川事務所の木村勲所長は、大雨の際に住民の迅速な避難につなげるための河川情報の発信について紹介しました。また、NHKの「ニュースウオッチ9」でおなじみの気象予報士の齊田季実治さんは、土砂災害や浸水、高潮などの事象ごとに視覚的に分かりやすいよう、伝え方を工夫していると説明しました。



このほか、長野市の加藤久雄市長は、河川の氾濫などに備え、洪水ハザードマップの配布や防災備品の充実などの対策に力を入れていると説明したほか、地域や学校での防災の取り組みも紹介され、訪れた人たちは熱心に耳を傾けていました。



ディスカッションを聞いた男性は「災害はいつ起きてもおかしくないと感じました。どうしたら身の安全が守れるのか、日頃から家族とともに考えていきたい」と話していました。